

「甲州の山猿」といふ言い方を昔からされるが、実はこの山猿は意外にも海猿だったって話をしようと思う」。思想家・人類学者の中沢新一さん(山梨市出身)は、甲府・県立図書館で開かれた講演会でこう話し始めた。山国である甲州は海と非常に関わりが深い土地柄であり、そのことが「ユニークな県民性」をつくっているのだという。

県民性ルーツ 中沢新一さん解説

〈五味優子〉

中沢さんは子どもころから、歴史家で叔父の故網野善彦さん(笛吹市出身)から、山梨県人のベースになったのは「海の人たち、海民」だとする意見を聞かされていたという。「学者として慎重な人だったので証明は大変だったよ。うだが、僕はそういうことはない。今日はその証明をしたい」と切り出した。

実際に山梨に人が住み着いたのはいつ頃で、一体どこから来た人たちだったのか。中沢さんは地質学の古地図を示し、甲府盆地の底部がかつて巨大な湖であったこと、次第に干上がって湿地帯となったことなどを説明。「山梨には旧石器時代から人はいたようだが、多く住み着くようになったのは縄文時代。湿地帯周辺の山の中腹部に帯のように暮らしていた」。さらに長野・富士見町史に収載された「富士層月弧地帯」の地図を提示し、「縄文期、甲府盆地と長野の諏訪や伊那、犀川の辺りまでと、東は現在の町田の辺りまでに、同じような文化を持つ民族が住んでいた」と言及。同一の生産用具を持って雑穀農耕を営み、風

「甲州の山猿」実は海猿

俗習慣を等しくする民族が一带に割拠していたという。

川筋から内陸へ

「この地図を見ると、山梨県人は相模川と多摩川をさかのぼって山を越え、甲府盆地に入ったと推察できる」。一部は山梨から諏訪へ移り、南は伊那、北は松本平の方まで同じ民族が入り込んだ。

そのため、いわゆる県民性の原型というものは「かなり古い時代に来た」と言及。「今見ても諏訪と甲州の人は非常に気質が似ている。出会い頭に『発かます』というコミュニケーションが発達した文化だと思っている」。

中沢さんによると、縄文文化は台湾やポリネシアなどの南洋域の人々が九州南部の大隅半島に上陸し、日本列島の沿岸沿いに全国へ広がった。各地の川筋から内陸部へ入り、狩猟と採集の文化が拡大した。その中の1グループが相模川などを経て山梨にたどり着き、県内では笛吹川や釜無川、富士川流域を居住地に文化をつくっていった。

一方、稲作文化を持った「倭人」

と呼ばれる人たちも、南中国などから九州へ上陸し全国へ移動した。県内へは富士川をさかのぼって入ったとされ、「駿河湾から甲府にかけて穂見神社が多く見られるが、穂見というのは稲作民の象徴。富士川を通じて入ってきた稲作民は、今の南アルプス市の櫛形を中心とする平地に定住し農業地帯をつくった」と説明した。

「縄文的な発想」

「つまり山梨県は、縄文時代のベースを形成した人たちも、農耕が始まった弥生文化の発端をつくった人たちも海からやってきた。海人、海民系の人々だと言える」。また、山梨の人間関係を象徴する「親分子分制度」や「無尽」の文化も、縄文・弥生時代に起因する。稲作が普及し富の蓄積が起ると、有力者が生まれ、貧富の差や上下関係が生じる。そのため、「親分子分制度は弥生時代辺りを起点と考えていいんじゃないか」。一方、互いに富を持ち寄って分かち合う相互扶助である無尽は「縄文的な発想と言える」とした。

中沢さんは「どんな土地にも歴史があり、時に古代まで根差し、それが人々の感情や人間関係のベースをつくっている」と説明。その上で山梨は「海からやってきた人々が山の中に住んで風土をつくってきた。普段意識しないかもしれないが、私たちは非常にユニークな県民性だと言える」と話した。



「縄文人は独自の宗教を持っていた。山梨の面白いところはそれが今も残っているところ。石棒・石皿・丸石からなる道祖神がそう」と話す中沢新一さん
—甲府・県立図書館

なかざわ・しんいちさん 1950年山梨市生まれ。思想家。人類学者。2016年、南方熊楠賞を受賞。著書に「チベットのモーツァルト」「カイエ・ソバージュ」シリーズ「アースダイバー」シリーズ「森のバロック」など。